

薬剤師以外の者や 調剤ロボットによる業務支援は、 薬剤師の味方か？ 敵か？

日本病院薬剤師会理事
福井大学医学部附属病院薬剤部長
後藤 伸之 Nobuyuki GOTO



医薬情報委員会を担当させていただいております。どうぞよろしくお願い致します。

野村総合研究所によるニュースリリース（2015年12月2日）では、10～20年後、日本の労働人口の約49%の就いている職業が、人工知能やロボット等で代替できるという衝撃的な調査結果が発表されています。この結果を見て、自分の仕事も人工知能に奪われてしまうのではないかと不安になった人も多いのではないのでしょうか。仕事を奪うだけでなく人工知能が人間を超えるなどと言われたり、不安を煽るようなニュースも散見されるようになってきました。しかし、実際のところ人工知能の存在はそんなに人を脅かすものではなく、パソコンと同じく、人工知能が普及しても人工知能が人に代わるのではなく、人がやらなくてもいいところを補ってくれ、人にしかできない仕事に人間が集中していく環境を整えてくれるというのは、様々な業界で進みつつあります。すなわち、我々は、仕事を「奪う」ではなく、人間の能力を「拡張」する役割を人工知能が担ってくれるという関係づくりを考えることが重要であると言われています。

2019年4月2日に「調剤業務のあり方について」（厚生労働省医薬・生活衛生局総務課長通知 薬生総発0402第1号）が発出され、そのなかで「調剤に最終的な責任を有する薬剤師の指示に基づくこと」「薬剤師が最終的に確認すること」を前提に、薬剤師と薬剤師以外の者が実施可能な調剤業務、さらに調剤機器や情報技術の活用も含めた業務効率化の取り組みのあり方が示されました。この関係は、前述した人工知能と人間の役割分担の考え方に非常に似た関係性に思えるのは私だけでしょうか？

この「調剤業務のあり方について」における業務の再検討は、手段であって目的ではなく、これを行う目的は「薬剤師の対人業務の充実」だと思います。薬剤師の対人業務を充実させるため、薬剤師以外の者のサポート、調剤機器や情報技術の活用による対物業務の効率化です。

また、人工知能が普及してくれば、我々は知識の量を誇ることはできなくなり、技術における専門性も主張できなくなるでしょう。しかし、これらが開発されるここ数年間に我々はそのような人工知能やロボットをつくる努力をしなければ、医療的見地ではなく、工学的見地からの人工知能やロボットが幅を利かせてしまうことになってしまいうでしょう。

我々は、自分の仕事も人工知能に奪われてしまうのではと漠然と不安を感じていないで、消えることを恐れず、職能を意識して自信をもって「自分がやらなければならない仕事」は何かを考えながら、我々をサポートしてくれる薬剤師以外の者の研修プログラムやロボットづくりに積極的な取り組みが求められているのではないのでしょうか。人工知能やロボット化を図ることにより、考えもしなかった新しい職能や展望が開けるかもしれません。

薬剤師が、薬を調剤するところまでの対物業務を管理しつつ、患者に薬を渡し、さらに病気が治るまでフォローアップする対人業務を充実させることにより、薬剤師が国民の健康に対してさらに重要な役割を果たすことができるようになると思います。